

ある小川の物語

みんなを助けようとした小川が、やがては大河へと変わってゆくお話です。



はるか遠い、ある山国に、一つの湖がありました。そして、そのそばには一つの川が流れていました。

湖は山のふもとに広がり、そして川はそれより少し高い山から流れていました。

湖は、自分をとても誇らしく思っていました。

「ねえ、小川さん、私はとってもキレイだろう。それにこんなに大きくて水が澄んでいるんだ！」と言いました。

小川は、「そうね、あなたはとっても美しいわ！きっと友達もたくさんいるんでしょうね。だって、こんなに大きいから、あなたは、飲みたいと思う誰にでも水をあげることができるでしょ！それに比べて私の存在なんか、小さくて誰にも気づかれないわ。」と答えました。

「はっはっはっ！」湖は大声で笑いました。「なぜ、よそ者なんかに私の水を分けてやらなくちゃならないんだい？そんな事をすれば私が小さくなってしまっじゃないか。」



ある日、山に住んでいるヤギが湖にやって来て、「わあ、なんてきれいな湖なんだろう。僕は道に迷ってしまって、のどがカラカラなんだ。湖さん、水を頂いてもいいかい？」と聞きました。

湖は、「水は、よそで飲んでくれ。それから、君の汚いひづめを私の水に浸さないでくれよ。」とムツとして答えました。

た。

ヤギは悲しくなりましたが、しかたがありません。その場を離れようとした時です。小さな声が聞こえてきました。「ヤーギさん、こっちにいらっしやい。私は小川よ。ちっぽけで誰も気付いてくれないけど、あなたにあげるくらいの水はたっぷりあるわ。さあ、好きなだけ飲んでちょうだいね。」

「わあ、小川さん、本当にありがとう。助かったよ。」とヤギは答えて、ピチャピチャ、ゴクゴク、おいしそうに小川の水を飲みました。

又、ある時は、ツバメ達が飛んで来ました。

「わあ、湖だわ！飛び疲れてもうクタクタ、これからもまだまだ長旅は続き、湖さん、お水を飲ませて下さいな。」

「エー、何だって！」と湖は不機嫌そうに答えました。「君達の羽にはホコリが付いているじゃないか。私はホコリには我慢がならないんだ。あっちへ飛んでいってくれよ！」



しかたなく、ツバメ達が、空へ舞い上がったその時です。誰かの呼び声が聞こえてきました。

「ツバメさん、可愛いツバメさん達、私の方へ降りて来て！小さい流れだから誰にも気づかれないけど、あなた達にあげるくらいのお水はタップリあるわ。どうぞ好きなだけ飲んでちょうだい！」

「ありがとう、小川さん。あなたは本当の友達ですね！」とツバメ達は言って、その小川でのどの渇きをいやしました。

たくさんの動物や鳥達がやって来ました。最初はみんな、湖に水を分けてもらえるように頼みましたが、結局は、いつも、そのそばの小さな流れに、助けてもらっていました。

しかし、ある夏の暑い日、思いがけない事件が起こりました。

「たすけーて！たすけて！」と小さなネズミが叫んでいます。ネズミは湖に飛び込んで、アップアップしながら、「湖さん、どうかウサギさんを助けてあげて下さい。彼は足をケガして歩けないんです。もうずいぶん、水を飲んでないので、死にそうなんです。」と懇願しました。

「私に一体何をしろって？」と湖は驚いて尋ねました。

「あなたが少し、水を跳ね飛ばしてくれたら、ウサギさんに届いて、ウサギさんは水が飲めるんです。」と小さなネズミは答えました。

「なんてバカげた事を！」と湖は言い、波を起こしてそのネズミを押し流してしまいました。」

「小さなネズミさん、私じゃ助けられませんか？」と小川は叫びました。

「ご親切にありがとう。でも、あなたの流れは小さすぎて、ウサギさんのところまで届かないでしょう。」とネズミは悲しそうに答えました。



「ちょっと待って、私に考えがあるわ！」

と小川は叫びました。

「母なる山よ！母なる山よ！」と小川は声を限りに叫びました。

しかし、山はうららかな陽ざしを浴びて、ぐっすりと寝込んでいました。

「力を貸してちょうだい、ネズミさん！」

小川はネズミの助けを借り、一緒に力

いっぱい叫びました。

「母なる山よ～～！！！」

「騒々しいな、おまえ達、いったい何が起きたというのだ？」山はやっと目を覚ましました。

「ウサギさんが足をケガして、水を欲しがっています。私は何としてもウサギさんを助けなければいけません！」と小川は説明しました。

「でも、一体、どうやって助けると言うんだね？おまえはそんなにちっぽけじゃないか…」と山はいぶかしげに聞きました。

「山の頂上には雪があるでしょう。太陽を浴びて、雪解け水になっていますね。どうかその水を私に分けてくださいませんか。そうすれば私はウサギさんを救う事ができます！」

「そんなにちっぽけなお前が、誰かを助けるためとはいえ、なんと大きな願いを抱いたものだ。よし、願い通りにしてやろう。」と山は答えました。



すると突然、以前は、山頂から大量に湖にそそぎ込んでいた雪解け水が、その小さな小川の方へと流れだしたのです。

湖は声を上げる暇もなく、あっという間に、乾いた沼地へと変わってしまいました。

一方、小川は、とうとうと豊かな水をたたえた大河となり、またたく間にウサギのところまで達しました。その水

は、ウサギの喉をうるおし、傷ついた足を洗い流し、そして、さらにはるか遠くまで流れて行って、川の兩岸に集まる全ての生き物に、澄んだ冷たい水を与えながら、ゆっくりと海まで流れてゆきました。

水を飲んだ動物達は、「あの堂々とした流れを見てごらん？あの川は、初めは小さな小さな流れだったんだ。でも必死にみんなを助けたいと願ったので、あんなに大きな河に変わったんだよ。」と口々に伝えあったそうです。